なる洞谷山永光寺四百七十六代に住したる久外嬾良が、寺運の衰頽を憂へ、同寺の由緒の特に優秀なる所以を高唱したもので、洞谷雜書といひ、後世嬾良を中興の祖とするが故に中興雜記ともいふ。

チユウゴシヨウ　中小將　加賀藩では文祿三年正月に中小將の名目が見えるから、是より先既に備はつたものであるが、姓名は明らかでない。後大坂の役には其の姓名が見え、寛永四年士帳には四十二人を數へ、萬治・寛文に至つても連綿したが、人數は次第に減少し、延寶五年三月十五日には之を罷めて、皆御馬廻組に加へられ、中小將の代りには後に御表小將が置かれた。

チユウゴシヨウ　中小姓　高祿の士家の給人で、若黨よりも稍階級の宜しきものを中小姓といふこともあつた。この種類の中小姓は、藩末まで繼續してゐた。

チユウゴシヨウクミガシラ　中小將組頭　御中小將組頭の初は明らかでないが、前田綱紀の時寛文三年横山志摩正房に命ぜられて、役料二百石を賜はつたのが起原であらう。次いで九年岡島兵庫一宗を加へて二人となつたが、延寶二年横山は若年寄に任ぜられ、五年三月岡島致仕し、同月十五日御中小將を罷めた爲廢職となつた。

チユウゴシヨウバンガシラ　中小將番頭　御中小將御番頭は、慶長年間江守覺左衞門値孝の之を勤めたのが姓名の顯れる始であらう。大坂の役には宮井太郎左衞門・行山主馬・不破忠左衞門・伴雅樂助等の當職であつたことが兩役軍記に見える。其の後淺野四郎兵衞などが勤め、萬治二年死亡の時まで兼帶した。役料は前田利常時代にはなく、綱紀時代から百五十石を賜はつた。萬治二年横山志摩正房御近習頭より命ぜられて當職となり、寛文三年御中小將組頭に轉じ、神尾伊兵衞直保之に代つて九年御先筒頭に轉じた。野村與三兵衞重德・北川庄右衞門之に代り延寶二年四月轉役、三年三月二十三日藤田平兵衞安勝、同月二十四日永井傳七郎正良兩人が御歩裁許より兼帶を命ぜられ、同五年中小將の廢止と共に罷めた。

チユウザ　中座　膝を席に着けて座するが如き姿勢となるをいふ。藩侯が老臣の前を過ぎる時には、必ず中座の禮を行うた。

チユウサンシキ　籌算式　一册。享保八年有澤致貞の著。厚紙にて製したる籌を用ひ、加減のみで乘除を行ふ法を述べたもの。この法は古來あつたもので、致貞の發明ではない。又同十年に著した算法指要は、籌算式の說明である。明治廿五年大聖寺の人西尾一之の著した籌算完璧も亦同じい。

チユウザンリヨウウン　籌山了運　石川郡曹洞宗大乘寺七代の住持。加賀に生まれ、出家具戒の後南禪寺省德に參じ、辭して大乘寺桂巖英昌に師事すること一年、遂に玄奧を究め、桂巖の寂後同寺の席を嗣いだ。永享四年八月二十八日壽八十三を以て寂。

チユウシ　中士　→シヅク　士族。

チユウジヨウサンノウジンジヤ　中條山王神社　河北郡北中條に鎭座する。式內等舊社記に、『中條山王神社。井上庄中條庄鎭座。庄內十七村之總社也。今稱中條山王明神。』と見える。本社は明治六年六月日吉神社といひ、十四年十月三輪神社に改め、以て式內三輪神社たることを主張するに至つたが、それには異說がある。

チユウジヨウモヨ　中條茂余　嘉永六年四月金澤三社に生まる。もと山田氏。漢學を藤田維正に、國學を富橋富兄に學び、歌道に志ある者を集めて小坂神社獻詠會を起した。明治三十九年二月十八日歿。

チユウジヨウリユウ　中條流　相州山田地福寺の僧慈恩といふ者摩利支天に通夜して得た兵法を、檀越中條兵庫助が受けて、甲斐豐前守に傳へ、大橋勘解由左衞門高能から、富田九郎左衞門長家、その子治部左衞門景家に傳へられた。この劍術を中條流といふ。治部左衞門に二子あつて、兄五郎右衞門は眼病の爲江州一乘寺村に閑居し、後薙髮して名を勢源といひ、諸國に武者修行をした。弟治部左衞門景政家を繼ぎ、その術に達して豐臣秀吉の師範となつたが、景政は男與六郎景勝が戰死したので、門弟山崎六左衞門を嫡女の聟として家を繼がせた。それが後の越後重政である。加賀藩へは景政の時から仕へ、中條流の兵法も共に傳はつたが、それから富田流と稱することになつた。

チユウシンキサラギノユキ　忠臣二月雪　一册。安永九年二月八日金谷御殿で高田善藏が中村萬右衞門を殺害した事實を小說化したもので、本書にあつては前者を坂田源藏、後者を永村伴右衞門ともぢつてゐる。著者不明。

チユウセンジ　中川寺　石川郡松任に在つて、天台宗に屬する。天保十四年中川佐次兵衞といふ者、今の本尊を信仰して一宇を建て、明治十三年八月寺號公稱の許可を得た。

チユウダン　中段（チユウダ）　鳳至郡大屋庄に屬する部落。中段の小字に院の馬場のあるのは鳳至院の遺で、郡家の所在であらうと考へられる。

チユウダンタモンテン　中段多門天（チユウダ―）　鳳至郡中段今の白山神社をいうた。能登誌に『中段村の產神多門天は、昔は大社にて、社僧も多かりしとて、今に石壇・礎等其儘あり。又仁王門有し所とて、今も仁王堂と小名に呼で百姓四五軒あり。又阿彌陀堂といふ所もありて、其所の岡に石碑あり。』とある。

チユウテイソウカ　仲庭宗可　曹洞宗の僧。永光寺の寂室了光に投じて出家し、研究すること多年、遂に祕訣を受け、辭して支那に遊び、偏く名山巨刹を訪ひ、太白に登つて淨禪寺の塔を禮し、後歸國して永光寺主となつた。

チユウホウモクニヨ　冲峰嘿如　石川郡曹洞宗大乘寺五十六代の住持。肥前の人、濱田氏。同國小島寺乙禪に受業し、文政三年肥前瑞雲寺に首職となり、石見永明寺鐵額牛和尚に嗣法し、六年石見榮泉寺に住し、七年永平寺に瑞世し、十二年京都の無學寺に移り、次いで丹陰苗秀寺・美濃全昌寺等に轉住した。弘化三年四月廿四日大乘寺に入り開堂演法し、五年二月二日病により五十三歳を以て寂。

チヨ　千代　石川郡松任の俳人。元祿十六年生。表具師福增屋某の女。幼時北潟屋大脛の許に婢となつて、初めて俳句を學んだといふ。享保四年十七歳の時、美濃の支考行脚の途千代の家を訪うて、その作を推稱した。舊說によれば、千代は十六歳・十八歳又は廿一歳の時婚嫁したとせられたが、享保十年小松の不五舍宇中のものした傳千代女書、及び千代三十三回忌の追悼集なる無射集に三宅橘園